V

苗代川と金山

（第 68 景）苗代川より

1　苗代川（1）

（第 68 景）苗代川

1　竹？
2　細工場（細工所）　セッジョ
3　成形する
4　轆轤
5　土踏み（原料を踏む）
6　叩き成形する？
7　登窯
8　薪を抱える
9　薪を割る
10　半胴（ハンズ）を抱える
11　土篩（つちふる）い（原料を篩う）
12　原料を撃ちならす
13　俵を運搬する
14　水簸（すいひ）場
15　水簸装置
16　攪拌する
17　桜？
18　松

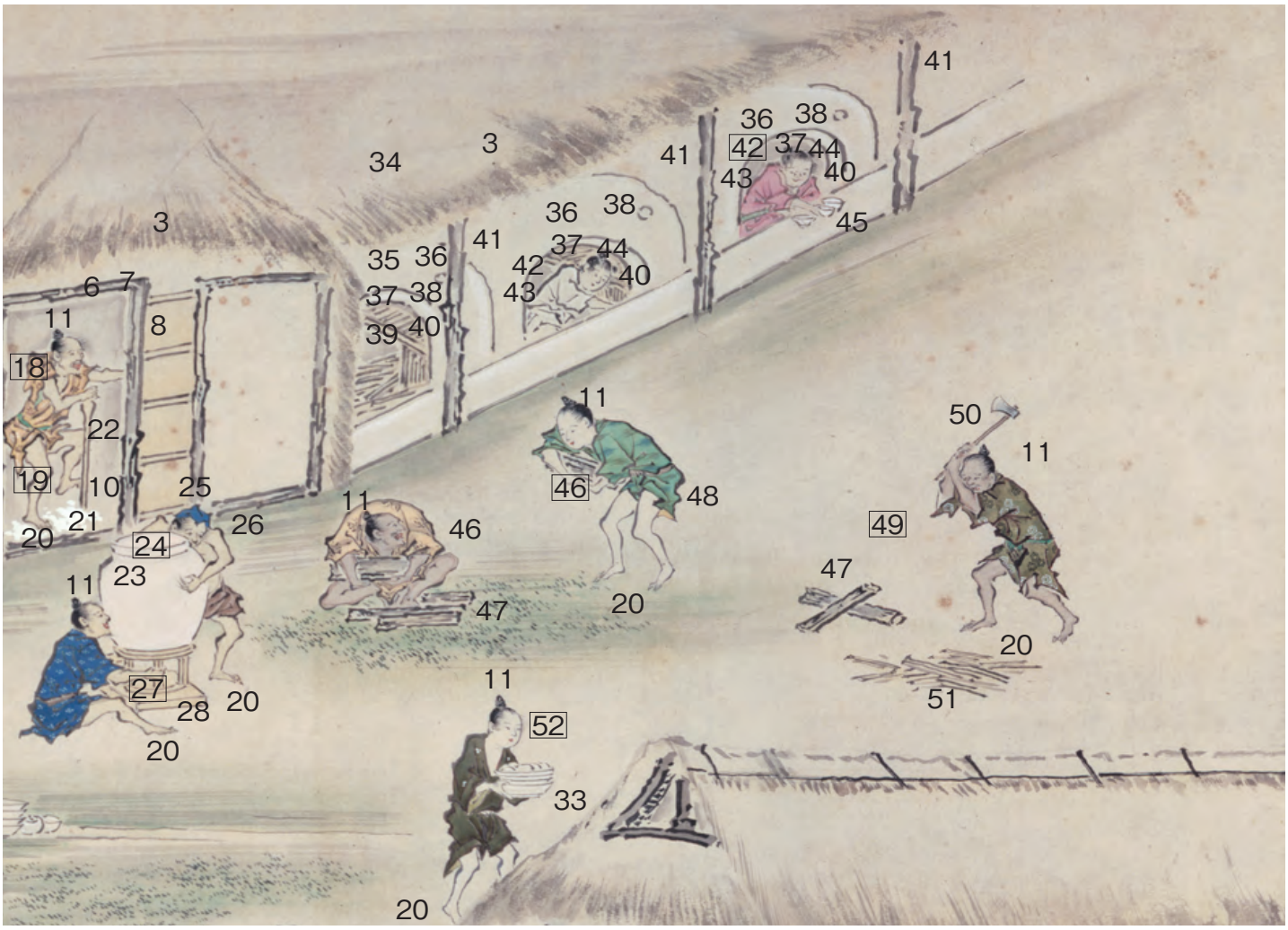
a　苗代川

薩摩国日置郡の苗代川（現、日置市東市来町美山・美山元寺脇）における陶業の様子を描いた図。苗代川は、慶長の役（1597-98年）の際に、薩摩へ連行された朝鮮陶工の村として知られる。近世の苗代川では、日本化が進む一方で、薩摩藩の政策により、髪型など朝鮮の風俗の一部が保持されたとみられている［久留島2014、井上2014、鈴木2014］。当地で生産された薩摩焼は、苗代川焼とも呼ばれ、いわゆる「黒薩摩」や「白薩摩」と呼ばれる陶器や、磁器の製造も行われ、廉価な日用雑器から藩御用の高級品などまで多種多様な製品が生産された［小野1932、前田1934、田沢・小山1941］。この図では、原料を扱う作業から窯での作業に至る一連の製造工程が、異時同図法により描かれている。また『薩藩名勝志』などに描かれる陶工らの喫煙の様子は、ここには描かれておらず、意図的に外された可能性が考えられる。なお当該図の解説は［小野1932、野間1974、沈1975、鮫島1987、四元1988、深港2000・2014ab、渡辺芳郎2004・2014］を主に参照した。（橋口亘）

2　苗代川（2）

部分 1

1　竹？
2　細工場（細工所）　セッジョ
3　茅葺き
4　土壁
5　小舞（こまい）
6　出入口
7　枠木
8　板壁
9　半製品
10　土間
11　髷
12　成形する
13　轆轤（ろくろ）
14　轆轤を設置する方形の穴
15　腰掛け板
16　大鉢
17　髭
18　腕まくりする
19　土踏み（原料を踏む）
20　裸足
21　原料
22　杖
23　大甕
24　叩き成形する？
25　被り物
26　諸肌脱ぎ
27　支え持つ
28　板
29　半胴を抱える
30　茶家（ちょか）
31　鉢
32　半胴　ハンズ
33　皿
34　屋根
35　登窯（のぼりがま）
36　房・室　コブ
37　出し入れ口
38　火窓
39　窯内部
40　窯壁（ようへき）
41　柱
42　窯内で作業する
43　子供
44　唐子髷（からこまげ）
45　碗
46　薪を抱える
47　薪
48　尻絡
49　薪を割る
50　斧
51　細く割られた薪
52　皿を抱えて運搬する

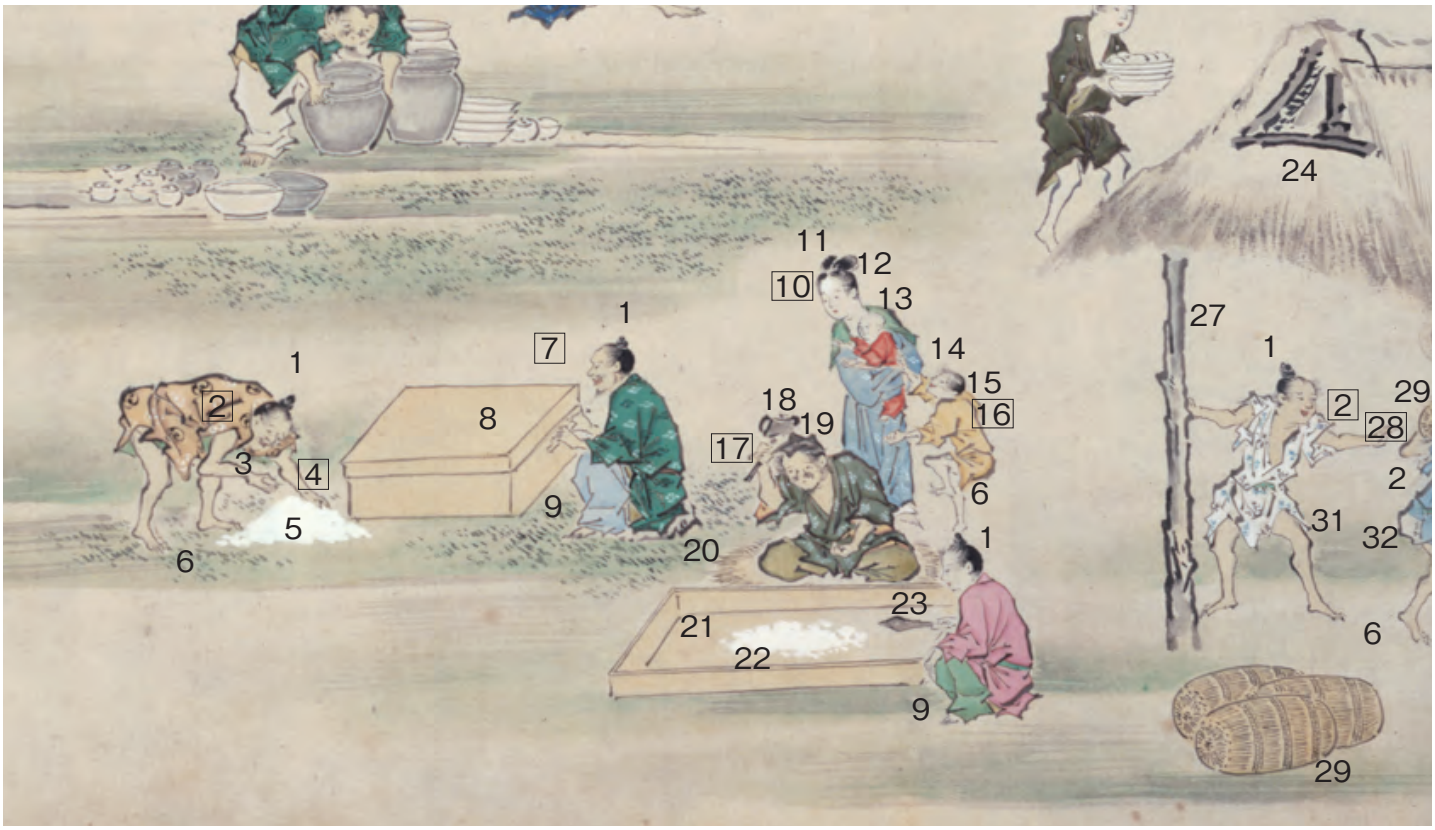


苗代川における陶業の様子を描いた苗代川（1）の図（66-67 頁）の上半部分の拡大である。画面左上には、茅葺きとみられる細工場（細工所）が描かれ、その屋内では、原料の上に乗り体重をかけ足で踏み練る作業や、陶工が轆轤（ろくろ）を使って製品を成形している様子が描かれる。轆轤を使用している陶工の下には腰掛け板が描かれる。

屋外では、大型製品を叩き成形している作業や、半胴（ハンズ）・鉢・茶家（ちょか）などとみられる器物を並べている様子のほか、窯焚用とみられる薪割りなどの様子が描かれる。画面上方には、茅葺きとみられる覆屋のついた登窯が描かれ、子供とおぼしき小柄な人物が窯内に入って作業している様子がうかがえる。

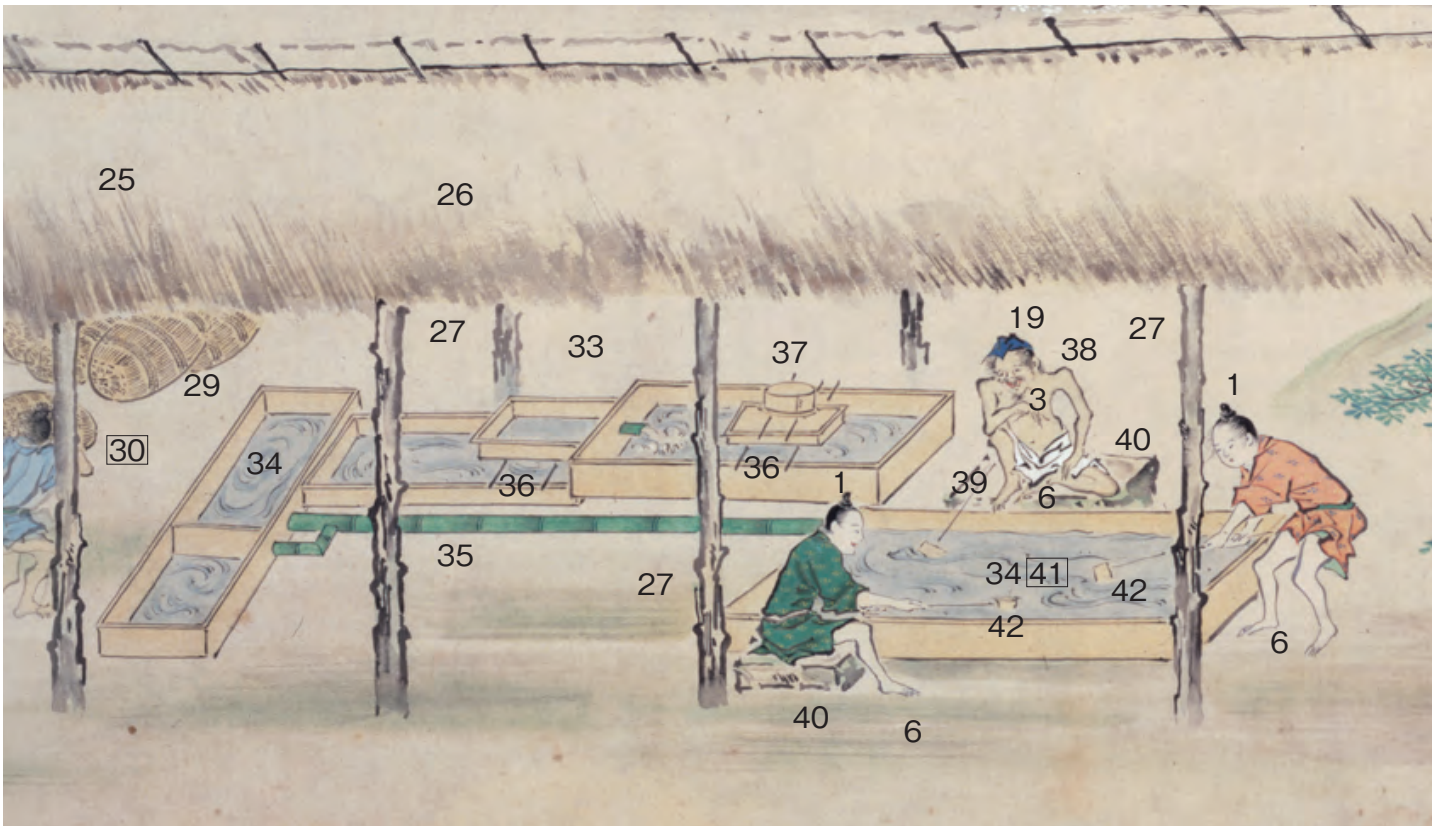
この拡大部分に描かれる人物のうち、足元が確認できる人物については、全員が裸足で表現されている。登場人物の髪型については、被り物をしている 2 名を除いて確認でき、このうち、窯に入って作業する子供とおぼしき唐子髷の 2 名を除き、それ以外の人物（男性）たちは頭頂部で髪を一箇所に束ねる朝鮮式の髷を結っている。男性の中には、顎髭と口髭をたくわえている者もみられる。なお本解説は［小野 1932、野間 1974、沈 1975、鮫島 1987、四元 1988、深港 2000・2014ab、渡辺芳郎 2004・2014］を主に参照した。（橋口亘）

3　苗代川（3）



部分２

1　髷
2　腕まくりする
3　髭
4　原料を触る
5　原料
6　裸足
7　土篩（つちふる）い（原料を篩う）
8　篩箱（篩い器）
9　立て膝
10　作業を見守る
11　女性
12　大陸風の髷
13　赤子
14　子供
15　ざんばら髪
16　騒ぐ
17　原料を撃ちならす
18　撃ち具
19　被り物
20　敷物（ムシロ？）
21　土盤
22　原料
23　工具
24　茅葺き
25　屋根
26　水簸（すいひ）場
27　柱
28　指図する
29　俵
30　俵を運搬する
31　尻絡（しりからげ）
32　ツギ
33　水簸（すいひ）装置
34　水槽
35　竹樋
36　渡し棒
37　濾（こ）し器（曲物（まげもの）？）
38　諸肌脱ぎ
39　立て膝（片膝）
40　腰掛け台
41　攪拌（かくはん）する
42　柄杓（ひしゃく）



苗代川における陶業の様子を描いた苗代川（1）の図（66-67 頁）の下半部分の拡大である。各地から集められた原料は、粉砕やふるいにかけられるなどして用いられた。画面左には、土盤の上で原料を撃ちならす様子や、篩箱（ふるいばこ）を用いて原料をふるいにかける様子等が描かれる。その傍らには、赤子を抱きながら作業を見守る女性と、その人物に何かをせがむようなしぐさの子供が描かれる。

画面右下では、原料を水に入れて攪拌し、水槽や竹樋などでつくられた装置を利用して水簸（すいひ）している様子が描かれる。水槽の上には、曲物の濾（こ）し器とみられる道具等もみられる。水簸の作業場は、簡素な造りで、丸太と思しき柱や、茅葺きとみられる屋根が描かれる。

この拡大部分に描かれる人物のうち、足元が確認できる人物については、全員が裸足で表現されている。登場人物の髪型については、被り物をしている 2 名を除いて確認できる。このうち、赤子を抱いた女性は大陸風の左右に広がった髷を結っており、赤子とその傍らの子供は髷を結っていないが、それ以外の人物（男性）たちは頭項部で髪を一箇所に束ねる朝鮮式の髷を結っている。男性の中には、顎髭や口髭をたくわえている者もみられる。なお本解説は［小野 1932、野間 1974、沈 1975、鮫島 1987、四元 1988、深港 2000・2014ab、渡辺芳郎 2004・2014］を主に参照した。（橋口亘）

4　苗代川（4）

（第 69 景）苗代川其二

1　神舞
2　祝子（はふりこ）
3　神刀　シンカル
4　朝鮮式帽子　サバングァン
5　伝統衣装　モンツル
6　裸足
7　焚き火
8　朝鮮伝統楽器を演奏する
9　伶人（れいじん）
10　打楽器　クェングァリ
11　打楽器　チャング
12　太鼓（どら）　ブック
13　銅鑼　チン
14　縦笛　ピリ
15　正座
16　敷物
17　神舞を鑑賞する
18　朝鮮式帽子
19　草履
20　柳

a　其二

薩摩藩は朝鮮半島から連れてきた陶工たちを保護するとともに、服装や髪型、言葉などの風俗習慣の保存を強要した。橘南谿（1753-1805 年）の紀行文『西遊記』には次のような記述がある。「薩州鹿児嶋城下より七里西の方ノシロコといふ所は、一郷皆、高麗人なり。そのかみ、太閤秀吉公、朝鮮国御征伐の時、嶋津の先君、彼国の一郷の男女老若、皆とりことなして帰り給ひ、薩州にて彼朝鮮の者どもに一郷の土地を賜ひ、永く此国に住せしめ給ふ。今に至り、其子孫打続き、朝鮮の風俗のままにて、衣服、言語も皆、朝鮮人にて、日を追ひ繁茂し、数百家と成れり。」［高木ほか 1991］。

画面は、祭祀の際に捧げられた朝鮮式の神舞と朝鮮楽器の演奏の描写である。神舞は、異国で故郷を偲ぶ陶工たちにとって、民族の祖神である檀君（だんくん）を祀る崇高なものであったが、薩摩藩主にとっては、異国趣味を満足させるための鑑賞の対象でもあった。藩主が参勤交代等で当地を通過する際にも舞われている［四元 1979］。

画面左では、伝統的な衣装モンツルを身につけ、サバングァンを頭に被った祝子（はふりこ）が、シンカルと呼ばれる神刀を右手に 2 本持って舞っている。その周りには、5 人の伶人が座り、やはり朝鮮式の楽器を奏でている。クェングァリは真鍮で作った丸くて平たい打楽器である。チャングは中心部が細くくびれた打楽器で、筒の両側に張った革を手とばちで打って演奏する。ブックは太鼓のことである。チンは真鍮で作った銅鑼で、クェングァリとよく似ているが大きさがそれよりも大きい。ピリは竹製の縦笛である。

画面右には、神舞を鑑賞する 5 人の男女が描かれているが、衣装はいずれも、その形状、色柄、着こなしから判断して、韓服ではなく和服のように見える。また、左の絵図の伶人たちも朝鮮式の伝統的な座り方である胡座ではなく、日本式の正座をしているように見える。朝鮮文化の伝統を継承しながらも徐々に日本化しつつある集落の様子が描かれているのであろうか。（駒走昭二）

5　金山（1）

（第 85 景）金山

a　金山

薩摩藩の金山の経営は永野（ながの）金山の発見に始まる。宮之城佐志村（みやのじょうさしむら）（現、さつま町宮之城）の川筋は砂金の採取場で川丁場といわれた。領主島津久通は石見銀山から内山与右衛門、また肥後から笠伊兵衛尉らの山師を招いて川上の曾木（そぎ）・本城（ほんじょう）・永野あたりを採鉱せしめた［新田 2013］。その結果、1640（寛永 17）年 3 月、永野宍焼谷の川中に砂金を発見、久通は藩主島津光久にこれを献じ、光久は正式に幕府の許可を得て久通に採掘を命じた。久通は本郷久加を金山総奉行とし、奉行所は永野に置かれた。久加は領内外より 2 万人余の金掘り人足を集め、金山はやがて桑原郡横川郷上之村（かみのむら）（現、霧島市横川町）のうち、山ヶ野一帯にもおよび、柵が巡らされた。鉱山経営を取り仕切る山先役には内山与右衛門が任じられたという。藩ではそのほかにも江戸時代の中期にさかんに金山の開発が試みられているが、多くは中途で閉山となっている。そうしたなかで、永野・山ヶ野金山は戦後まで採鉱が続けられた数少ない鉱山の一つである。『三国名勝図会』巻 41 にはほぼ同様な永野・山ヶ野金山図があるので、ここに掲げた図も同金山のものとみてよいであろう。

（上原兼善）

6　金山（2）

部分１

部分２

1　間歩
2　松明？
3　掘大工（金掘り・掘子）
4　板枠
5　鶴嘴
6　籠（駄積）
7　鋪着（たなし）
8　裸足
9　湧水
10　丁髷
11　半切桶
12　掬鋤
13　鉱石
14　着物（つぎはぎ）
15　樋
16　女郎？
17　草履

部分1は間歩（坑道）に入ろうとする掘大工（金掘り・掘子）を描いている。間歩は板枠で構築されている。鉱夫は筒袖の単衣で、着丈がひざまでの短い「たなし」という鋪着をつけ、背中には「駄積」という鉱石を運び出す籠を背負っている。「駄積」の中の物はよく判別できないが、松明のように見える。すでに松明を灯して手にしているが、予備か。もう一方の手は山道具の一つ鶴嘴を担げている。「切羽」といわれる採掘現場では、ほかに山槌・手のみなどを使って採掘作業が行われていたのであろうが、この図には現れていない。また鉱山の採掘にあたって一番大きな問題は地中から湧き出てくる水を如何に外に汲み出すかであるが、その作業についても図には描かれていない。山ヶ野金山でも井戸のように掘り下げられた坑道から湧き出る水の抜き取りに苦労したといわれ（『金山萬留　乾』）、水が間歩から吐き出されてくる様子を見ると、間歩内で湧水と格闘している掘子の姿が浮かんでくる。

部分2は間歩から吐き出されてくる排水を利用して鉱石とズリ（廃石）とを分離する作業が中心に描かれている。そうした選鉱作業は「せり」と呼ばれる。「せり」には水が必要であるから、川から水路が引かれることが多いが、川が利用できない場所では溜め池を造り、湧水や雨水を確保して利用した［吉田陞 1997：52-53、112］。図では半切桶に水が流し込まれ、鉱石が掬鋤で入れられようとしている。ここには見えないが、『三国名勝図会』巻41には小石と粘土で底面と側面を固めた長方形の「せり」のための施設が描かれている。なお、図の右に描かれた身綺麗な女性たちは、女郎であろう。山ヶ野田町には遊郭もあった［吉田陞 1997：172］。

（上原兼善）

7　金山（3）

部分 3

部分 4

1　着物（つぎはぎ）
2　鉢巻
3　手拭い（被り物）
4　握り棒
5　裸足
6　木の台
7　杵
8　石
9　臼
10　鉱石
11　水注
12　茶碗
13　皿
14　盆
15　草葺き
16　碾臼（ひきうす）
17　紐
18　鉱石を砕く
19　砂金の吐き出し口
20　揺鉢（ゆりばち）
21　前掛け
22　水？
23　台
24　柱（丸木）
25　鉱石の手割
26　山槌
27　へわ？
28　かなめ石

外に運び出された鉱石は、椀がけ法といって、水を入れた桶の中で揺鉢や木製の揺板（ゆりいた）（板をかまぼこ状にまげ、一方を鉱石が超さないように止め板を取り付けたもの）を使って夾雑物（きょうざつぶつ）と選り分けられる［吉田陞 1997：94、110］。その後、金鉱石のみが鉄槌（てっつい）で打ち砕かれ、あるいは石臼（いしうす）でひかれてさらに余分なものが取り除かれる。部分3・4は「搗場（つきば）」という砕石場での搗鉱（とうこう）の様子を描いている。部分4では3人の男が山槌（やまつち）で鉱石を打ち砕いている。いっぽう小屋では3人が踏臼（唐臼（からうす））で、2人が四角い碾臼（ひきうす）でせり（砕）にかかっている。鉱石を砕くにあたっては小石が周辺に飛ぶので、臼口に「へわ」という藁製の輪がとりつけられたといわれるが［吉田陞 1997：84］、踏み石による搗鉱の図（部分3）ではそれらしいものは見えない。鉱石の手割りを行っている男が持っている丸いものがそれであろうか。碾臼には少量の水が加えられるため金鉱石は泥状になって砂金溜にあふれ出ており、それをさらに女性が吐き出し口で受け、揺鉢（ゆりばち）で揺って砂金を取り出している。こうした揺鉢での選鉱は主に女性が担った。

（上原兼善）

8　金山（4）

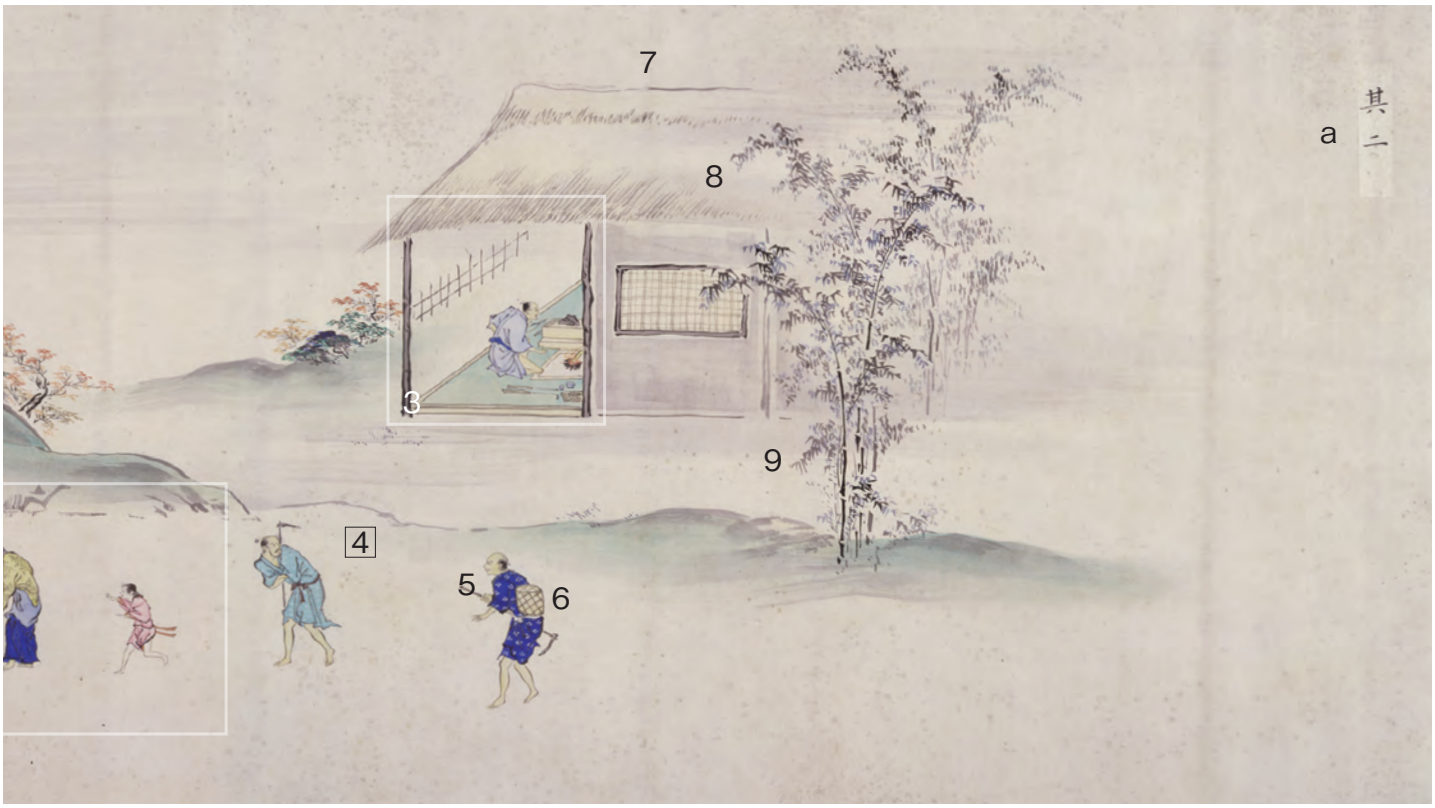
（第 86 景）金山其二

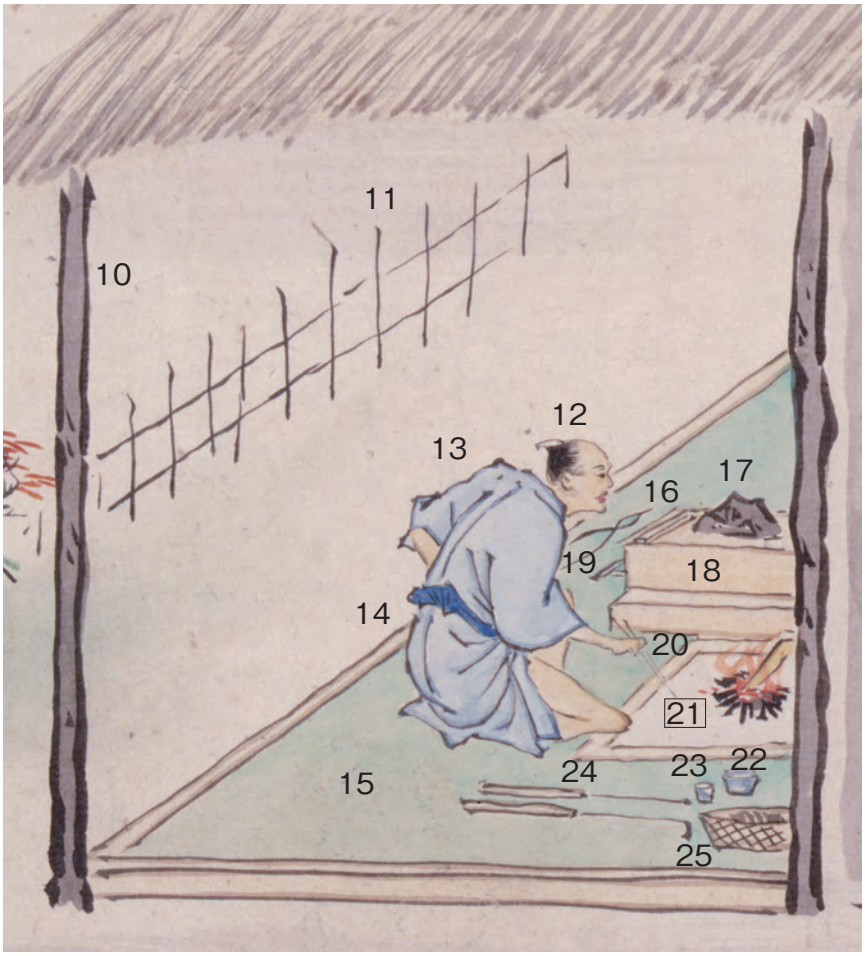
1　瓦葺き（金山奉行の役宅？）
2　松
3　小川
4　間歩へ向かう掘大工
5　鶴嘴
6　籠（駄積）
7　床屋（前銷屋）
8　草葺き
9　竹
10　柱（丸木）
11　柵
12　吹大工（金吹き）
13　小袖
14　帯
15　畳
16　鋏
17　砂金
18　鞴
19　握り
20　吹き箸
21　炭火で砂金を溶かす
22　坩堝
23　茶碗
24　灰かき棒
25　炭の入った笊

a　其二

すり潰され、夾雑物が取り除かれた鉱砂は灰吹という方法によって金に精製される。その作業が行われる場が部分 3 の床屋（前銷屋）である。精製にあたるのは吹大工（金吹き）で、山稼ぎの中では特別の位置にあった者と思われる。ここではその点は明確にはならないが、『三国名勝図会』巻 41 の図（参考絵図（2）－⑧）では、吹大工は整った身なりで鞴を操り、やはり小綺麗な身なりをした妻と思われる女性が子供を遊ばせ、その機嫌をとる下男らしき者が描かれている。

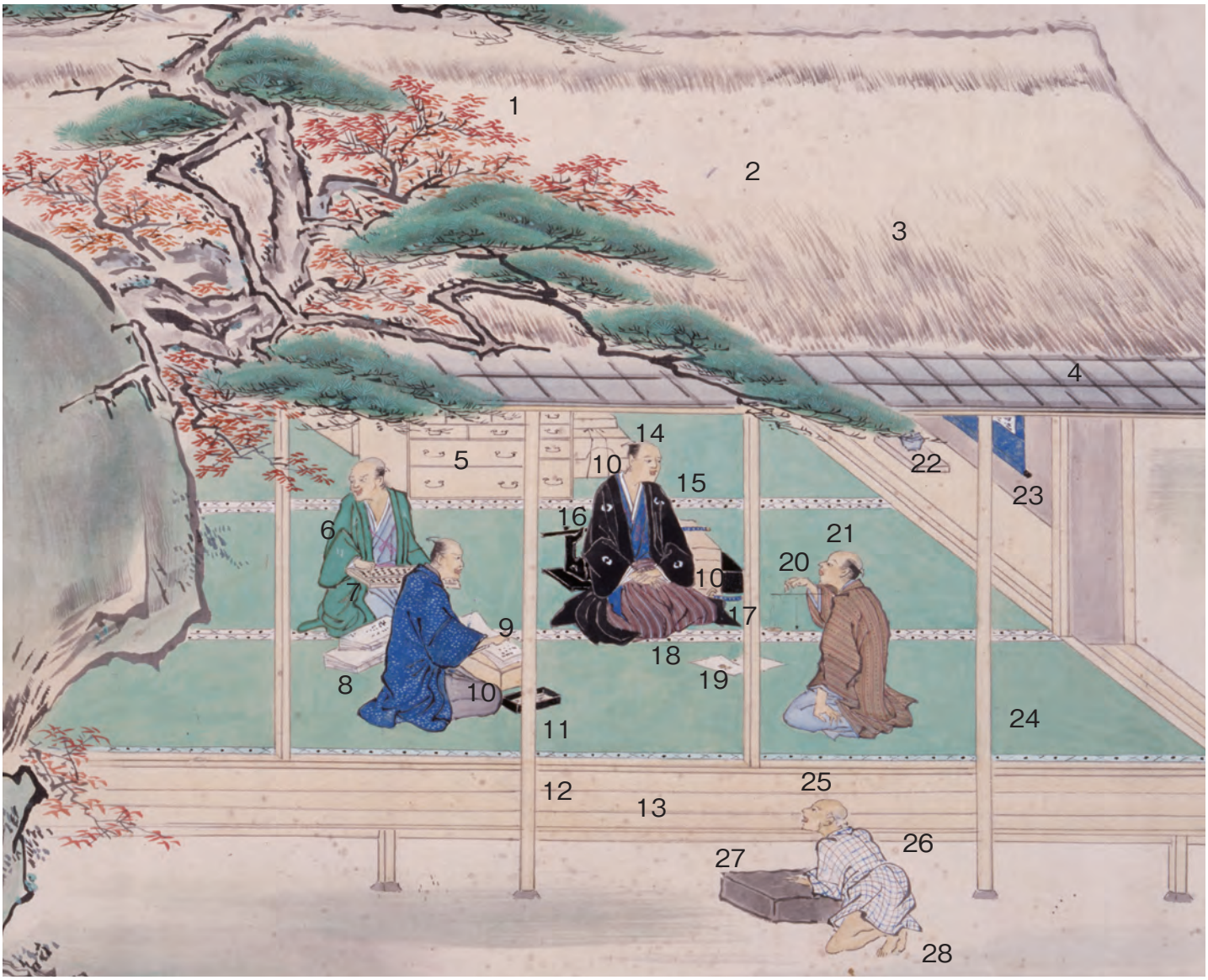
灰吹は炉にしかけられた坩堝の中を動物の骨灰や松葉灰などで塗り固め、その上に砂金と鉛を置き、加熱して合金にする。熱源は炭で、炭は坩堝の上に渡した 2 本の鉄棒の上に置かれた。図中にも 2 本の鉄棒らしきものが見え、吹屋大工が火箸で炭の位置を変えようと手を伸ばしているのがうかがえる。加熱によって合金の湯ができたところで、横の鞴でさらに風を送り続けると、鉛は酸素と結合して酸化鉛と化す。比重の軽い酸化鉛は坩堝中の灰の中に染み込み、灰の表面に金の塊が残る。吹き分けられた金は金見役によって品位査定が行われた（『三国名勝図会』巻 41）。　（上原兼善）





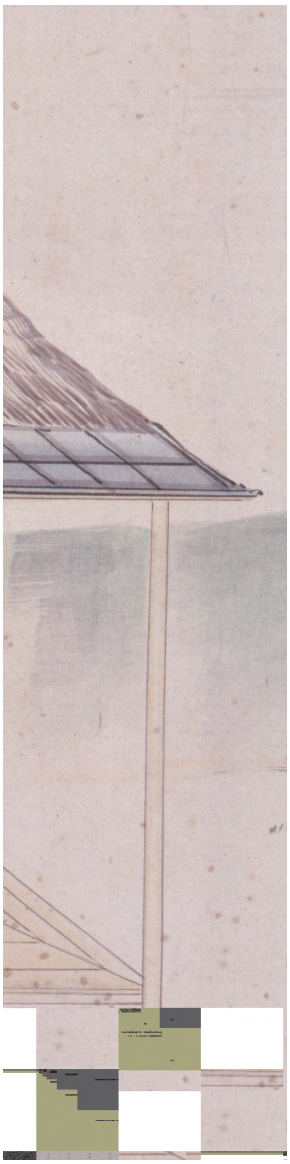
部分 3

9　金山（5）



部分 1

1　櫨？
2　奉行所
3　草葺き
4　軒瓦
5　箪笥
6　与力？
7　算盤
8　勘定帳簿
9　筆
10　書類収納箱
11　筆箱
12　柱（角材）
13　縁側
14　金山奉行
15　羽織
16　刀架（かたなかけ）
17　刀
18　袴
19　金
20　天秤秤（てんびんばかり）
21　山先役（やまさきやく）？
22　香炉
23　掛け軸
24　畳
25　山先役の走り使い？
26　小袖
27　踏み石
28　裸足
29　老婆
30　食べ物
31　盆（朱塗り）
32　子供（男）
33　前掛け
34　草履
35　子供（女）
36　裸足



部分２

精製された金は金山奉行のもとで量と品位が確認された。部分１はその様子を描いたものである。金の計量が行われている草葺きの建物は奉行所であろう。奉行の前に置かれた金を天秤ばかりで量っているのは金山経営の責任者である「山先役（やまさきやく）」と思われる。「山先役」の報告をうけて、金山奉行所の与力とみられる役人らが算盤（上二つ玉、下五つ玉）をはじき、帳簿付けをしている。踏み石に手をついてかしこまっているのは明らかに身分の低い者で、「山先役」の走り使いかと思われる。

金を計量している場へ、老婆が何か食べ物を届けようとしている（部分２）。老婆の身なりはそうみすぼらしくない。鉱山稼ぎの者で妻帯が許されたのは「山先役」など限られた者のみであったから、その家族かも知れない。朱塗りのお盆の上の食べ物はそれほど量のあるものではなく、しかも子供がせがんでいる様子からすると、お茶うけ程度のものか。白く見えるから饅頭の類かも知れない。鉱山では子供の存在もめずらしいから、やはり「山先役」の家族ということが考えられよう。（上原兼善）